

## エビイモの遺伝資源保存に向けて

当センターでは、伝統野菜等の遺伝資源の維持保存に取り組んでいます。様々な野菜の種子を保存管理していますが、種子の発芽能力は年を経るごとに低下していきます。そのため、毎年何種類かを栽培し、定期的に種子を更新しています。

冬の京野菜として需要が多いエビイモは、種子ではなく、種イモから栽培します。イモは長期保存できないことから、当センターでは、遺伝資源が途絶えないよう毎年エビイモを栽培し、今年は5月13日に種イモから育成した苗を定植しました。

今後12月の収穫まで、翌年の良質な種イモを生産するために土入れなどの伝統的な栽培管理を行い、施設公開などで来所された府民の方にエビイモ栽培の様子や貴重な品種の紹介を行います。



定植作業の様子



定植したエビイモ

## 万願寺トウガラシで使用できる農薬の登録拡大を目指す (作物残留試験)

中丹地域を中心に栽培される「万願寺トウガラシ」については、現在、使用が認められている農薬が少なく、使用できる農薬の登録拡大※が求められています。

特にハダニについては、登録済みの殺虫剤を使うと天敵資材※のカブリダニに影響があるため、ほかの殺虫剤を使用できるよう要望があります。そこで、当センターでは、ピーマン・ナスで使用できる殺虫剤をトウガラシで使用できるようにするための試験を実施しています。

5月に苗を所内のパイプハウスに定植し、7月に殺虫剤を散布して、果実への殺虫剤成分の残留量を調査する予定です。

※登録拡大:農薬の効果や残留を確認して、これまでは使用が認められていなかった作物でも、制度に基づいて使用できるようにすること

※天敵資材:害虫の天敵を防除資材として利用するもの。カブリダニはアザミウマやコナジラミなどを食べる天敵であり、ハウスに放飼して使用する



ハウスに定植した万願寺トウガラシ  
(定植20日後)

ハダニ

## **京都ブランドのカンショ（サツマイモ）**

### **選定に向け植え付けを実施**

丹後地域の開発農地では、干し芋加工用カンショの栽培が広がっています。

当所では、他府県と差別化できる京都オリジナルの品種選定に向けて、農研機構が育成した品種・系統の糖度や収量性を比較する栽培試験を行っています。

5 月 23 日には、令和 6 年度までに絞り込んだ 3 品種（‘ふくむらさき’、‘あかねみのり’、‘ほしあかね’）と 3 系統の苗を国営開発農地にある当所試験ほ場に植え付けを行いました。

今後は、生産者、加工事業者や JA 等関係機関と連携し、京都ブランドの加工用カンショとして良食味で加工適性の高い 1 品種・1 系統の選定を進めていきます。



植え付けの様子(約 1500 本の苗を植えました)

## 八十八夜に当所施設公開を開催

当所では、一般の方々に宇治茶の魅力を体感していただくために、毎年、施設公開を開催しています。

今年度は、八十八夜にあたる5月1日に開催したところ、約150名が来所されました。製茶工程や茶の審査法の紹介、研究成果の展示のほか、水出しの玉露と煎茶の試飲会を実施し、茶種ごとの特徴や水出し茶の健康機能性について理解を深めてもらいました。

来場者からは、「説明が分かりやすく大変勉強になった」、「もっとお茶を飲みたくなった」、「水出し茶を作ってみようと思った」等の声がありました。

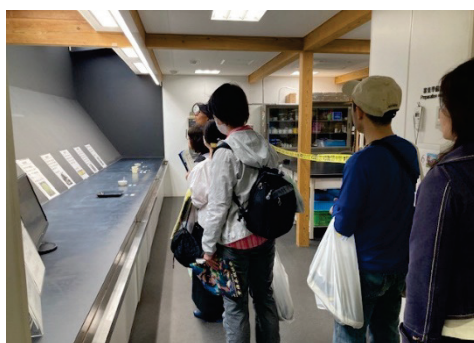
当所では、研究所ならではの情報発信を続け、宇治茶ファンの裾野を広げること、茶業振興に貢献していきます。



一番茶製茶見学



研究成果パネルの展示



審査室見学



水出し玉露・煎茶試飲会

農 林 セ ン タ ー ( 茶 業 研 究 所 )

## **金時ニンジン新品種育成のため採種を行っています**

金時ニンジンは、京ニンジンとも呼ばれる京都になじみの深い野菜です。機能性成分「リコピン」をトマトの2～3倍含み、鮮やかな赤色であることから、総菜、ジュースなどの原材料として、加工業者等から増産が望まれています。しかし、根が細く長いいため、栽培に適した場所が限られ、収量性は低く、栽培面積は10年前に比べて半減しています。

そこで、当センターでは令和4年度に、西洋ニンジンのように太くて短い金時ニンジンの新品種の育成を開始しました。現在、育成中の系統が開花期を迎えており、受粉用のヒロズキンバエを放飼し、次世代の採種を行っています。今夏には収穫した種子をほ場に栽培し、色や形が有望な系統の選抜を進める予定です。



## 鶏ふん堆肥化時に発生する臭気の軽減を

### 目指す試験を開始

鶏ふんを縦型密閉堆肥化※装置を用いて、堆肥化する際に発生する高濃度アンモニアは、既存の脱臭手段で処理することが難しく、新たな対策が求められています。そこで、当センターでは排気中の炭酸ガスとアンモニアの反応を水中で促進することにより、アンモニアの放出量を削減する装置の開発を目指しています。

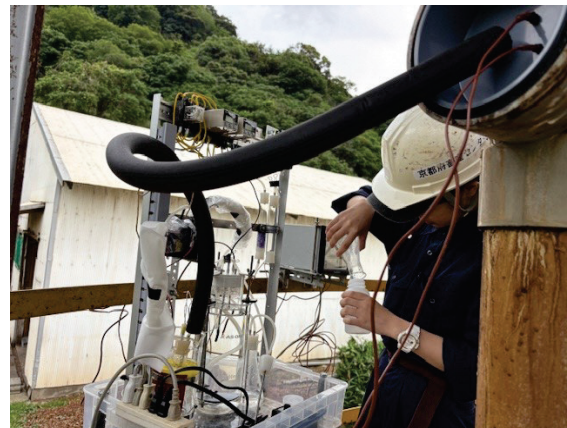
5月23日に舞鶴市の養鶏場にて、アンモニアおよび炭酸ガスの水への吸収速度を測定するため、実験装置による回収試験を開始しました。

今後は、水中のアンモニア濃度によりアンモニアの吸収速度がどのように変化するか等、実機の設計に必要なデータを収集していきます。

※縦型密閉堆肥化：鶏ふんを断熱密閉された円形の発酵槽内で、攪拌・通気を行い、微生物による発酵を促進させることで堆肥化する方法のひとつ。



縦型密閉堆肥化装置



アンモニア回収の様子

## **漁場診断および種苗放流適地セミナーの開催**

5月22日に、伊根町泊漁港において、漁場診断および種苗放流適地セミナーを開催しました。本セミナーは、持続的な磯根漁業※の推進を目的とするものであり、漁業者や関係者11名が参加しました。

当日は、漁場診断を実施した後に、実際の漁場の様子を踏まえたアワビやサザエの種苗放流適地等について講演しました。漁業関係者からは、「放流マニュアルだけではわからない点が良くわかった」などの意見が聞かれ、適地放流への理解を促進することができました。

今後も、持続可能な磯根漁業の振興のための取組を進めます。

※磯根漁業:海岸の岩礁帯(磯根)で、海藻や貝類などを採捕する漁業



船上調査により漁場診断を実施



漁場診断の結果を踏まえた放流適地について講演を受ける漁業者

## 山口県農林総合技術センターを事例調査

### ～オープンイノベーションラボ開設に向けて～

京都府では、農林水産技術センターの食品加工技術研究部門として、令和 9 年に京都府南部総合地方卸売市場（宇治市）内に「京都プレミアム中食オープンイノベーションラボ（仮称）」を開設する予定です。

ラボの開設に向けて、5 月 8 日に山口県農林総合技術センターを訪問し、先行事例調査を実施しました。同センターは、令和 5 年 4 月に、農業及び林業部門の研究機関を農業大学校に移転・再編し、新たに食品加工オープンラボを開設しました。今回は移転に向けたスケジュール管理、食品加工施設の運営方法や課題について、聞き取りと意見交換を行いました。

当センターでは、事例調査を踏まえ、より効果的なラボの運営方法や研究方針の策定を進めます。



山口県農林総合技術センター 本館